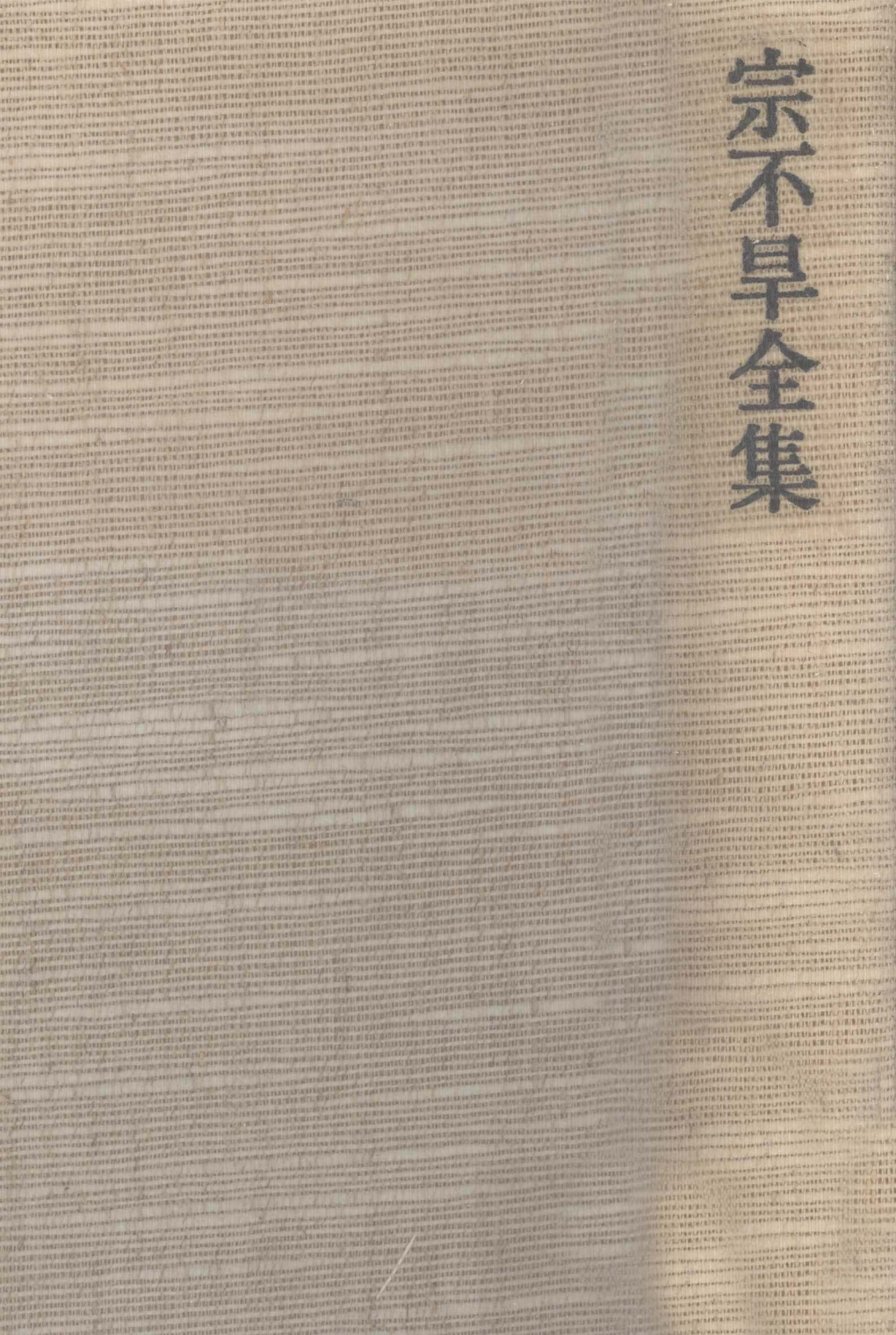




宗不旱全集

高木
護編

五月書房

宗 不早全集

定價七五〇〇円

発行日 昭和五十八年六月二十日

著者 宗 不 早

編者 高 木 護

発行者 鶴 田 實

発行所 株式会社 五 月 書 房

東京都千代田区猿樂町二丁目六番五号

郵便番号 一〇一

電話 (二三三) 四一六一番

振替 東京九一三三九四三

モリモト印刷・小泉製本

0092-12756-2409

宗不旱全集

目次

歌集

.....七

筑摩鍋

.....九

荔支

.....七一

短歌（拾遺）

.....一九

歌論集

.....一八一

柿本人麿歌集

.....一八三

平賀元義

.....二七一

万葉集「倭文機」

.....二九五

阿蘇惟馨卿の歌と長瀬田廬の歌

.....三二六

私の見た現代代表歌人の歌

.....三一九

太田水穂氏の『雲鳥』を評す

.....三一九

窪田空穂氏の『青水沫』を読む

.....三三五

若山牧水氏の『山桜の歌』を読む

.....三三三

尾山篤二郎氏の『まんじゅしゃげ』を読む

.....三四〇

中村憲吉氏の『林泉集』を読む……………三四五

植松寿樹氏の『庭燎』を読む……………三五四

北原白秋氏の『雀の卵』を読む……………三六二

花田比露思氏の歌集『さんげ』を読む……………三七九

川田順氏の『山海経』を読む……………三九〇

島木赤彦氏の『氷魚』を読む……………三九八

文集……………四一一

その頃（自叙伝の一部）……………四一三

羊齒籠つくり……………四二二

春光余録……………四三一

筑波山に登るの記……………四三四

十郎兵衛……………四三七

今田哲夫歌集「風日」拝読……………四三八

花田兄に……………四四一

手紙一つ

.....
四四三

アンケート回答答

.....
四四八

書評

.....
四五〇

詩集

.....
四五二

句集

.....
四五九

書翰集

.....
四六五

今田哲夫宛

.....
四六七

荒木精之宛

.....
四八九

村上半次宛

.....
四九〇

資料

.....
四九九

資料

.....
五〇一

年譜

.....
五〇五

不旱について

高木
護

.....
五二三

歌集

筑
摩
鍋

序言にかえて

一、歌集『筑摩鍋』刊なるにあたり、先ず一本をとりて故、李、順、高本紫溟先生の英霊にささぐ。著者壮年にして無頼の徒なり、おくれて学に志し、今日いささか心境開拓の道程にあるを得るは、ひとえに先生遺風の垂訓によるものなり。

一、さらに一本をとりて恩人中川小十郎先生に贈り、他に二本をとりて窪田空穂、花田比露志、二詞兄の机上に贈る。予の歌人にあらずして、今日多少の作歌経験を有し、読書の生活にあるをうるはまさしく右一先生二詞兄御厚誼のたまものなり。

五月十四日、誕生日

硯工不早こと 宗耕一郎識す

序歌

あふみなる筑摩の祭とくせなむつれなき人の鍋の数見む（伊勢物語）

あづまぢにかつぐ筑摩の鍋ならで何おもひてかいの願ひぞ（高本順）

笠女郎贈ニ 大伴宿禰家持一歌

ソク マヌニ オホルムラサキ コロモシメ イマダキズシテ イロニ デニケリ
託馬野爾。生流紫。衣染。未服而。色爾出来。（万葉集卷三）

台湾行

門司出帆

京^{みやこ}いでて海の八汐路乗りこえて石をひろひにわれは台湾に

台湾の螺^ら溪^{けい}にころぶぬば玉の石得まくほり海原わたる

雨の基隆

街ゆけば雨は寒しといふせしともし油の香のにほひけり

石を拾う

その昔ここにしふみし^{かはらいし}礧^{かい}石^{いし}今も来て踏むこの礧石

あら石の間にひそむぬば玉の石見おとすな今日の霞に

ぬば玉の石もあれどもふかむらさき玉と見まがふ石かもあらむぞ

ただひとりうち出でくれば磧のうへらんだい櫛大の山まながひにあり

チウタウラン
石人また来たりしかと喚びかけて礼みやふかくする里人さとびとらはも

君つひにこの濁水をさりかねぬまこと石人せきじんよと里人りじんわらへり

山々も大濁水だいたくすゐも霞みたり踏める磧の石もかすめり

うち見る彼方望郷山かなたぼうきやうざんこや櫛大山らんだいわが拾ふ石は水のたまもの

鳥一つ啼かぬ水辺にけふの日の今日の霞もくれにけるかも

菜の花の匂ふあたりの草を清みしばし憩はな石の肩に重し

濁水溪、新高郡牛温轡に溯りて二流となる、一は濁水本流、一は新高三山、秀姑巒山、櫛大、望郷、諸山の水をあつむる陳幽蘭溪の清流なり、一日この谿谷に遊びて、遥かに東京なる妻に、

旅なれば見はしきものぞ山川のしら瀬の真玉淀またまのうきなわ

元日

元日は為^すべき事なし小机に頬杖つきて遠く父を思ふ

元日はすべき事なし新聞の死亡広告などよみをり

元日は為^{うゑ}べき事なし漆とり壊れ硯を継ぎてあそぶも

人ひとりたづねも来ねばをさな児と遊ぶ吾れなりわれ馬に成り

正月の晴衣^{はれぎ}ひとつも着せ得ねど君をおもふこころゆたけきろかも

硯師は世のながれには乗りかねて斯くもまさびし子らよならふな

床の上に花ひと種^{くさ}もかざりえぬ春にはあれど子と遊びて足る

年賀状は押しつけがましくかくものにあらざる如しと茶のみつつ思ふ

人のもとに

垂乳根の君がみ母のみほとけに手向けの花も買へぬくるしさ

人を思ふことありて

住吉の粉浜すみのえ しはまの蜆汁しじみじにして塩うすくあらむところ思へど

住吉の神にいのりて恬淡てんたんの人にもがもところおもへど

江古田新田

一

江古田新田しんでんけさ清霜すがしものおろしたり天あめの鵜うら競つぐみふらむかも

この朝あさや小雀こからくるにはかぶら菜の霜は白くもあるべしと思ふ

隣り舎やは何する人ぞたまさかに顔は見すれどねまく戸閉きせる